

「訪問看護ステーション等が開設する医療・介護の相談室づくり」

3年計画 2013年度前期 完了報告書

提出年月日 平成 26 年 8 月 29 日

申請者 訪問看護ステーション アドナース
代表 鎌田智広

1. 研究目的

日々、訪問看護を行う中で「もう少し早く訪問看護が導入されていたら、こんなにまで病状が悪化しなかったのに」「定期的に訪問看護が導入されていたらもっと安定した在宅生活を送ることができたのに」と感じることもある。そこには、まだまだ訪問看護の存在が市民にとって身近なものではなく、訪問看護自体が知られていない現状があるからだと考えられる。もちろん介護保険制度の中では介護支援専門員に訪問看護の役割・必要性を伝えていくことはもちろんであるが、訪問看護ステーションがある地域の方々へ、相談室という入り口で訪問看護の存在を伝え、身近な存在として訪問看護ステーションが親しまれるようになったら、早期の訪問看護導入へ結びつくのではないだろうか。

2. 研究方法

平成 25 年 8 月～平成 26 年 7 月の毎月 4 回、土曜日の 9:00～12:00 に「無料、医療・介護の相談室」を設置。場所は洛西ニュータウンにある境谷商店街、訪問看護ステーション「アドナース」内の相談室スペースを使用。商店街内に老人福祉センターがあり高齢者の往来がある。訪問看護師 1 名を配置し、来場者に対面聞き取りでの相談を行った。

3. 結果

相談件数 12 件（述べ件数）

年齢構成 30 代 1 名 40 代 1 名 50 代 1 名
60 代 5 名 70 代 2 名 80 代 2 名 （相談内容の対象者の年齢）

相談内容 30 代 排尿時痛があり何かを受診したら良いかの相談。
40 代 夫が頸椎損傷、妻が介護してきたが大変なので助けてほしい。
50 代 娘が看護師、訪問看護をやりたいと言っているがどうしたら良いか。
60 代 夫が脳出血で入院した。3 か月たったが転院を促されている。転院しなければならないか。
60 代 妻が脳梗塞で入院している。病状の回復に合わせ計 4 回相談あり。急性期、リハビリ期など主治医よりの説明後に確認に来られている。
70 代 体幹に発疹ができています。ヘルペスか？
70 代 足が動かすににくい。近医では何も無いと言われたがパーキンソンか。
80 代 父が一人暮らし。今は元気だが介護保険はどうしたら使えるのか
80 代 病院から退院後、怒りっぽい、道に迷う、夜に突然起きて出ていこうとするなどあり、困っている。どうしたら良いか。

医療面での相談は、現在受けている医療への相談、医療を受けるにあたってのアドバイスがあった。介護面では、現在向き合っている介護へのアドバイス、またこれからへの不安から来る相談であった。その他として訪問看護への興味からの相談があった。

4・まとめ、課題

当初期待した相談業務から訪問看護の依頼へとつなげていくという結果は得られなかった。しかし、妻が入院している件についての相談者はリピーターになってくれており、今後退院する時には、退院前の相談はありと予測されるとともに、顔見知りである訪問看護ステーションへの依頼があると考えられることは評価される。また、看護師の娘様が訪問看護に興味があるがどうしたら良いかという想定外の質問もあったが、商店街というさまざまな方が往来する場所で医療介護の話題をちょっと気軽に相談できる場所としての存在価値はあるのではないかと感じる事ができた。

広報活動をチラシ・ラジオ番組での広告・のぼりにて行ってきたが、相談件数は約一か月に一件にとどまった。口コミでの広がりが一番信頼を得やすく、後の問題も少ないと考えられるが、宣伝広告の工夫が課題として挙げられる。また、相談員の訪問看護師確保も土曜日という設定のためか確保に苦慮する面があった。

5・感想

今回相談業務をおこなって、できるだけ問題回避を念頭におき固有名詞を出しての回答をひかえた。特に「どこの病院がいい?」「あそこの病院はどうか?」という質問は多かったが一般論的な回答にとどめた。こちらとしてはもっと突っ込んだ回答をした方が良いのかなとも思ったが、それでもみなさん満足された様子であり、いかに一般の方の知識量が少なく、一般論でも参考にされているのかが分かった。よって、あまり構えることなく気軽に立ち寄れる相談窓口というスタンスは有効なのかもしれない。

また、看護師の娘様の「訪問看護師に興味があるが」という相談ケースでは、娘様との面談・訪問看護体験へと結びつけることができた。これは本当にうれしいことであり、今後訪問看護師として進んでくれたらということなしである(もちろん訪問看護ステーションアドナースに来てくれることを期待するが)。

相談員の確保には苦労した。当初私がすべて担当し、実績や実際の様子を伝えることでステーション所長に引き継ぐことはできた。今後機能強化型訪問看護ステーションを意識するならばこういった相談業務も必要であり、スタッフへの説明・理解を得ていきとともにマニュアル等の整備も必要なのかもしれないと感じた。

「公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団の助成による」